

日本文学全集

2

源氏物語

下



日本文学全集 2

源氏物語

下

河出書房新社

日本文学全集 2 源氏物語(下)

© 1960

編集委員

青野季吉 荒 正人
川端康成 瀬沼茂樹
中島健藏

装 幀 者
原 弘

N D C

昭和 35 年 8 月 15 日初版印刷

昭和 35 年 8 月 18 日初版発行

定 価 290円

訳 者 与 謝 野 晶 子

発 行 者 河 出 孝 雄

印 刷 者 中 内 佐 光

印 刷：暁 印 刷 株 式 会 社

製 本：中央精版印刷株式会社

本文用紙：王子製紙工業株式会社

同 納 入：株式会社大和屋洋紙店

クローズ：日本クロス工業株式会社

同 納 入：株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話 東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

源氏物語 下

ま ぼ ろ し	御 ^み 法 ^{のり}	夕 ^{ゆふ} 霧 ^{きり} (一)	夕 ^{ゆふ} 霧 ^{きり} (一)	鈴 ^{すず} 虫 ^{むし}	横 ^{よこ} 笛 ^{ふえ}	柏 ^{かしわ} 木 ^き	若 ^わ 菜 ^な (下)
.....							
一五	一四	二四	二八	三	八	五	三

早 ^さ	総 ^{あは}	椎 ^し	橋 ^{はし}	竹 ^{たけ}	紅 ^{こう}	匂 ^{にお}	雲 ^{くも}
		が				に あ う の	隠 ^{かく}
蔵 ^{くら}	角 ^{かく}	本 ^{もと}	姫 ^{ひめ}	河 ^か	梅 ^{うめ}	宮 ^{みや}	れ
.....							
三〇	二五	三元	二六	二五	二六	二六	二六

蜻かへ浮うき東あずま宿やど
り

蛸あう 舟ふね 屋や 木き

三三八
三七一
四一〇
四五六

夢ゆめの手て
の
浮うき橋はし 習ならい

解 注
說 釈

四九〇
五三三
池田弥三郎
中村真一郎

源氏物語

下
卷

若 菜 (下)

小侍従が書いて来たことは道理に違いないが、また露骨なひどい言葉だとも衛門督には思われた。しかももう浅薄な女房などの口先だけの言葉で心が慰められるものとは思われないのである。こんな人の中へ置かずに一言でも直接恋しい方と問答のすることは望めないであろうかと苦しんでいた。かぎりない尊敬の念を持っている六条院に汚辱を加えるに等しい欲望をこうして衛門督がいただくようになった。

三月の終わる日には高官も若い殿上役人たちも皆六条院へまいった。氣不精になつてゐる衛門督はこのことを皆といつしよにするのもおつくうなのであったが、恋しい方のおいでになる所の花でも見れば氣の慰みになるかもしれないぬと思つて出て行つた。賭弓の競技が御所で二月にありそうでなかつたうえに、三月は帝の母後の御忌月でためであるのを残念がつてゐる人たちは、六条院で弓

の遊びが催されることを聞き伝えて例のように集まつて来た。左右の大將は院の御養女の婿であり、御子息であつたから列席するのがむろんで、そのために左右の近衛府の中將に競技の参加者が多くなり、小弓という定めであつたが、大弓の巧者な人も来ていたために、呼び出されてそれらの手合わせもあつた。殿上役人でも弓の芸のできるものは皆左右に分かれて勝ちを争いながら夕べに至つた。春が終わる日の霞の下にあわただしく吹く夕風に桜の散りかう庭がだれの心をも引き立てて、大將たちをはじめ、すでに酔つてゐる高官たちが、

「奥の方々からお出しになつた懸賞品が皆平凡な品でないのを、技術の専門家にだけ取らせてしまうのはよろしくない。少し純真なへた者も競争にはいりましよう」

などと言つて庭へおりた。この時にも衛門督が減入つたふうでじつとしてゐるのがその原因を正確ではないにしても想像のできる大將の目について、困つたことである、不祥事が起こつてくるのではないかと不安を感じだし、自分までも一つの物思ひのできた氣がした。この二人はひじょうに仲がよいのである。大將のために衛門督が妻の兄であるというばかりでなく、古くからの友情が互いにあつてむつまじい青年たちであるから、一方がなんらかの煩悶にとらえられてゐるのを今一人が見てはかわいそうで堪えられがたくなるのである。衛門督自身も院

のお顔を見ては恐怖に似たものを感じて、はずかしくなり、誤った考えにとらわれていることはわが心ながら許すべきことでない、すこしのことに人も人を不快にさせ、人から非難を受けることはすまいと決心している自分ではないか、ましてこれほど恐れ多いことはないではないかと心をむちうっている人が、また慰められなくなつて、せめてあのときに見た猫でも自分は得たい、人間の心の悩みが告げられる相手ではないが、寂しい自分はせめてその猫をなつてそばに置きたいとこんな気もちになつた衛門督は、氣違いじみた熱を持って、どうかしてその猫を盗み出したいと思うのであるが、それすらも困難なことではあつた。

衛門督は妹の女御にようごの所へ行つて話すことで悩ましい心を紛らせようと試みた。貴女らしい慎み深さを多く備えた女御は、話し合っているときにも、兄の衛門督に顔を見せるようなことはなかった。きょうだいですらわれわれはこうして慣らされているのであるが、思いがけないお顔を外にいる者へ宮のお見せになつたことはふしぎなことであると、衛門督もさすがに第三者になつて考えれば肯定できないことは思われるのであるが、熱愛を持つ人に対してはそれを欠点とは見なされないのである。衛門督は東宮とうきゅうへ伺候して、むろん御兄弟でいらせられるのであるから似ておいでになるに違ひないと思つて、お

顔を熱心にお見上げするのであつたが、東宮ははなやかな愛嬌あいぎやうなどはお持ちにならぬが、高貴の方だけにある上品に艶えんなお顔をしておいでになつた。帝のお飼ひになる猫の幾匹かのきょうだいがあちらこちらに分かれて行つてゐる一つが東宮のお猫にもなつていて、かわいい姿で歩いているのを見ても、衛門督には恋しい方の猫が思ひ出されて、

「六条院の姫宮の御殿におりますのはよい猫でございます。珍しい顔でして感じがよろしいのでございます。私はちよつと拝見することができました」

こんなことを申し上げた。東宮は猫がひじょうにお好きであらせられるために、くわしくおたずねになつた。

「支那の猫でございますして、こちらの産のものとは變つておりました。皆同じように思えば同じようなものでございますが、性質のやさしい人なれた猫と申すものはよろしいものでございます」

こんなふうに宮がお心をお動かしになるようにばかり衛門督は申すのであつた。

あとで東宮は淑景舎しよくしやの方の手から所望をおさせになつたために、女三にようさんの宮みやから唐猫が献上された。噂うわさされたとおりに美しい猫であると言つて、東宮の御殿の人々ばかりわいがつてゐるのであつたが、衛門督は東宮はたしかに興味をお持ちになつてお取り寄せになりそうであると観

察していたことであつたから、猫のことを知りたく思つて幾日かの後にまたまいつた。まだ子どもであつたときから朱雀院が特別にお愛しになつてお手もとお使いになつた衛門督であつて、院が山の寺へおはいりになつてからは東宮へもよく伺つて敬意を表していた。琴など御教授をしながら、衛門督は、

「お猫がまたたくさんまいりましたね。どれでしょう、私の知人は」

と言ひながらその猫を見つけた。ひじょうに愛らしく思われて衛門督は手でなでていた。宮は、

「實際容貌のよい猫だね。けれど私にはなつかないよ。人見知りをする猫なのだね。しかし、これまで私の飼つてゐる猫だつてたいしてこれには劣つていないよ」

とこの猫のことを仰せられた。

「猫は人を好ききらいなどあまりせぬものでございますが、しかし賢い猫にはそんな知恵があるかもしれません」などと衛門督は申して、また、

「これ以上のがおそばにいくつもいるのでございましたら、これはしばらく私にお預からせください」

こんなお願いをした。心の中では愚かしい行為をするものであるという氣もしてゐるのである。

結局衛門督は望みどおりに女三の宮の猫を得ることができて、夜などもそばへ寝させた。夜が明けると猫を愛

撫するのに時を費やす衛門督であつた。人なつきの悪い猫も衛門督にはよくなれて、どうかすると着物の裾へまつわりに来たり、からだをこの人に寄せて眠りに来たりするようになった。衛門督はこの猫を心からかわいがるようになった。物思ひをしながら顔をながめ入つてゐる横で、にやうに、うとかわいい声で鳴くのをなでながら、愛におごる小さき者よと衛門督はほほえまれた。

「恋ひわぶる人の形見と手ならせば

汝^{なれ}よ何とて鳴く音なるらん

これも前世の約束なんだろうか」

顔を見ながらこう言ふと、いよいよ猫は愛らしく鳴くのを懷中に入れて衛門督は物思ひをしていた。女房などは、

「おかしいことですね。にわかに猫を御寵愛されるではありませんか。あしたのものには無関心だつた方がね」と不審がつてささやくのであつた。東宮からお取りもどしの仰せがあつても、衛門督はお返しをしないのである。お預かりのものを取り込んで自身の友にしていた。

左大将夫人の玉鬘の尚侍は真実の兄弟に対するよりも右大将に多く兄弟の愛を持っていた。才氣のある、はなやかな性質の人で、源大将の訪問を受けるときにもむつまじいふうに取り扱つて、昔のとおりに親しく語つてくれるため、大将も淑景舎の方の羞恥を少なくして打ち解

けようとする気もちのないようなのにくらべて、風変わりな兄弟愛の満足がこの人から得られるのであった。左大将は月日に添えて玉鬘を重んじていった。もう前夫人は断然離別してしまつて尚侍が唯一の夫人であつた。この夫人から生まれたのは男の子ばかりであるため、左大将はそれだけ物をたらず思い、真木柱の姫君を引き取つて手もとへ置きたがつていたのであるが、祖父の式部卿の宮が御同意をあそばさない。

「せめてこの姫君にだけは人からそしられない結婚を自分がさせてやりたい」

と言つておいでになる。帝は御伯父のこの宮に深い御愛情をお持ちになつて、宮から奏上されることにお背きになることはおできにならないふうであつた。もとははなやかな御生活をしておいでになつて、六条院、太政大臣家につづいての権勢の見えるところで、世間の信望も得ておいでになつた。左大将も第一人者たる将来が約束されている人であつたから、式部卿の御孫女、左大将の長女である姫君を人は重く見ているのである。求婚者がいろいろな人の手を通じて来てすでに多数に及んでいるが、宮はまだだれを婿にと選定されるふうもなかった。かれにその気があればと宮が心でお思いになる衛門督は猫ほどにも心をひかぬのかまつたくの知らず顔であつた。左大将の前夫人は今も病的な、陰気な暮らしをつづ

けて、若い貴女のために朗かな雰囲気を作ろうとする努力もしてくれないために、姫君は寂しがつて、人づてに聞く継母の生活ぶりに憧れを持っていた。こうした明るい娘なのである。

兵部卿の宮は今も御独身で、熱心にお望みになつた相手は皆ほかへ取られておしまいになる結果になつて、世間体もはずかしくお思いになるのであつたが、この姫君に興味をお感じになり、縁談をお申し入れになると、式部卿の宮は、

「私はそう信じているのだ。だいに思う娘は宮仕えに出すことを第一として、つづいては宮たちと結婚させることがいいとね。普通の官吏と結婚させるのを頼もしいことのように思つて親たちが娘の幸福のためにそれを願うのはいいやしい態度だ」

とお言いになつて、あまり求婚期間の悩みもおさせにならずに御同意になつた。兵部卿の宮はこのむぞうさなきまりかたを物たらぬようにもお思いになつたが、軽蔑しがたい相手であつたから、ずるずる延ばして話の解消をお待ちになることもおできにならないで、通つて行くようにおおなりになつた。式部卿の宮はこの婿の宮をだいにあそばすのであつた。宮は幾人もの女王をお持ちになつて、その宮仕え、結婚の結果によつて苦勞されることの多かつたのに懲りておいでになるはずであるが、最愛

の御孫女のためにまたこうした婿かしずきをお始めになったのである。

「母親は時がたつにしたがつて病的な女になるし、父親はそちらの意志に従わない子だといってそまつに見ている姫君だからかわいそうでならぬ」

などとお言いになって、新夫婦の居間の裝飾までも御自身で手を下してなされたり、またお指図さしずをされたりもするのであった。兵部卿の宮はお亡なくしになった先夫人をばかり恋しがつておいでになって、その人に似た新婦を得たいと願つておいでになったために、この姫君を、悪くはないが似たところがないと御覧になったせい、通つておいでになるのにおつくりなふうをお見せになった。

式部卿の宮は失望あそばした。病人である母君も気分常態になっているときにはこの娘の思うようでない結婚を嘆いて、いよいよ人生をいやなものにきめてしまった。父親の左大將もこの話を聞いて、自分のあやぶんだとおりの結果になったではないか、多情者の宮様であるからと思つて、はじめから自分が賛成しなかった婿であったから困つたことであると嘆いていた。玉鬘夫人は宮の御情の薄さを継娘の不幸として聞いていながら、自分ももし結婚をしてそうした目に会つていたなら、六条院の人々へも、実父の家族へも不名誉なことになるのであつたと思つた。そして左大將の妻になった運命を悲しむ

気もなくなり、継娘にかぎりなく同情した。その自分の処女時代にも兵部卿の宮を良人にしようとは少しも思わなかった。ただあれだけの情熱を運んでくたすつた方が、左大將と平凡な夫婦になつてしまったことを輕蔑しておいでにならないかとそれ以来はずかしく思つていたのであると玉鬘夫人は思い、その宮が継娘の婿におなりになつて、自分のことをどう聞いておいでになるであらうと思うと晴れがましいような氣もするのであった。この夫人からも新婚した姫君の衣装その他の世話をした。前夫人がどう恨んでいるかというようなことは知らぬふうにして、長男、次男を中にして好意を寄せる尚侍に前夫人は友情をすら覚えていたのであるが、式部卿の宮家には大夫人という性質の曲まががつた人が一人いて、この人は常にだれのことも恨んで、罵言ののしりをやめないのである。「親王方というものは一人だけの奥様をだいじになさるというもので、派手な生活のできない補いにもなろうというもののだけに」

と陰口をするのが兵部卿の宮のお耳にはいったとき、不愉快なことを聞く、自分に最愛の妻があつた時代にも他との恋愛の遊戲はやめなかつた自分も、こうまでひどい恨み言葉は聞かないでいたとお思ひになつて、いっそう亡き夫人を恋しく思召すことばかりがつつて、自邸で寂しく物思いをしておいでになる日が多かつた。そうは

いうものの二年もその状態でつづいてきた今では、ただそれだけの淡い関係の夫婦としてすんで行った。

歳月がかさなり、帝が即位をあそばされてから十八年になった。

「将来の天子になる子のないことで自分には人生が寂しい。せめて気楽な身の上になって自分の愛する人たちとしじゅう出会うこともできるようにして、私人として楽しい生活がしてみたい」

以前からよくこう帝は仰せられたのであったが、重く御病氣をあそばされたときに、にわかに讓位を行なわせられた。世人は盛りの御代をお捨てあそばされることを残念がつて嘆いたが、東宮ももうおとなになっておいでになったから、お変わりになっても特別変わったこともなかった。ゆるぎない大御代と見えた。太政大臣は関白職の辞表を出して自邸を出なかった。

「人生の頼みがたさから賢明な帝王さえ御位をお去りになるのであるから、老境に達した自分が挂冠するのに惜しい気もちなどはすこしもしない」

と言っていたに違いない。左大將が右大臣になって関白の仕事もした。御母君の女御は新帝の御代を待たずに亡くなっていたから、後の位にお上れになっても、それはもうものの背面のことになって寂しく見えた。六条の女御のお生みした今上第一の皇子が東宮におなりになっ

た。そうなるはずのことはだれも知っていたが、目前にそれが現われてみればまた一家の幸福さに驚きもされるのであった。右大將が大納言を兼ねて順序のままに左大將に移り、この人も幸福に見えた。六条院は御讓位になった冷泉院に御後嗣のないのを御心の中では遺憾に思召された。実は新東宮だつて六条院の御血統なのだが、冷泉院の御在位中には御煩悶もなくてすごされたほど、例の密通の秘密はかくしおおされたが、その代わりにこの御系統が末までつづかぬように運命づけられておしまいになったのを六条院は寂しくお思いになったが、御口外あそばすことでもないのてただお心で味気なくお感じになるだけであつた。東宮の御母女御は皇子たちが多くお生まれになつて帝の御寵はますます深くなるばかりであつた。またも王氏の人が后にお立ちになることになっていることで、今度で三代にもなつていたから何かとあきたらぬらしい世論があるのをお知らせになったとき、冷泉院の中宮は以前もこうした場合に六条院の強い支持があつて、自分の後の位は定まったのであると過去を回想あそばしてますます院の恩をお感じになった。

冷泉院の帝は御期待あそばされたとおりに、御窮屈なお思いもなしに御幸などもおできになることになつて、あちらこちらと御遊幸あそばされて、今日の御境遇ほどお楽しいものはないようにお見受けされるのであつた。

帝は六条院においてになる御妹の姫宮に深い関心をお持ちになったし、世間がその方に払う尊敬も大きいのであるが、なお紫夫人以上の夫人として六条院の御寵を受けておいでになるのではなかった。年月のたつにしたがつて女王と宮の御中にこまやかな友情が生じて、六条院の中は理想的なおだやかな空気に満たされているが、紫夫人は、

「もう私はこうした出入りの多い住居から退きまして、静かな信仰生活がしたいと思います。人生とはこんなものということも経験してしまったような年齢にもなっているのですもの、もう尼になることを許してくださいませんか」

と、時々まじめに院へお話するのであるが、

「もつてのほかですよ。そんな恨めしいことをあなたは思うのですか、それは私自身が実行したいことなのだが、あなたがあとに残って寂しく思ったり、私といっしょにいるときと違った世間の態度を悲しく感じたりすることになってはという気がかりがあるために現状のままでいるだけなのですよ。それでもいつか私の実行の日が来るでしょうから、あなたはその後のことになさい」

などとばかり院はお言いになって、夫人の志を妨げておいでになった。女御は今も女王を真実の母として敬愛していて、明石夫人は隠れた女御の後見をするだけの人に

なつて謙遜さを失わないでいることは、かえつて将来のために頼もしく思われた。尼君もうれし泣きの涙を流す日が多くて、目もふきただれて幸福な老婆の見本になっていた。

住吉の神への願はたしを思い立って参詣する女御は、以前に入道から送つて来てあつた箱をあけて、神へ約した条件を調べてみたが、それにはかなり大がかりなことを多く書き立ててあつた。年々の春秋の神楽とともに必ず長久隆運の祈りをするなどとは、今日の女御の境遇になつていなければ実行のできぬことであつた、ただ走り書きにした文章にも入道の学問と素養が見え、仏も神も聞き入れるであろうことが明らかに知られた。どうしてそんな世捨人の心にこんな望みの樓閣が建てられたのであるうと、子孫への愛の深さが思われもし、神や仏にすまぬ気もされた。並の人ではなくてしばらく自分の祖父になつてこの世へ姿を現わしただけの、功德を積んだ昔の聖僧ではなかったかなどと思われ、女御に明石の入道を畏敬する心が起こつた。今度はまだ女御の行なうことにはせず、六条院の参詣におつれになる形式で京を立つたのであつた。

須磨明石時代に神へお約しになつたことはつぎつぎにはたされたのであるが、その以後もまた長く幸運がつづき、一門子孫の繁栄を御覧になることによつても神の冥

助は忘れずに、六条院は紫の女王も伴って御参詣あそばされるのであって、はなやかな一行である。簡素を旨として国の煩いになることはお避けになったのであるが、この御身分であつてはあるところまでは必ず備えられねばならぬ旅の形式があつて、自然に大きなことにもなった。公卿も二人の大臣以外は全部供奉した。神前の舞人は各衛府の次將たちの中の容貌のよいのを、さらに背丈をそろえてとられたのであつた。落選して嘆く風流公子もあつた。奏樂者も石清水や加茂の臨時祭に使われる専門家がより整えられたのであるが、ほかから二人加えられたのは近衛府の中で音楽のじょうずとして有名になつてゐる人であつた。また神樂の方を受け持つ人も多数に行つた。宮中、院、東宮の殿上役人が皆御命令によつて供奉の中にゐるのも無数にあつた。華奢を尽くした高官たちの馬、鞍、馬添い侍、隨身、小侍の服装までもきらびやかな行列であつた。院の御車には紫夫人と女御をいっしょに乗せておいでになつて、次の車には明石夫人とその母の尼とが目立たぬふうに乗つてゐた。それには古い知り合ひの女御の乳母が陪乗したのである。女房たちの車は夫人づきの者のが五台、女御の五台、明石夫人に属したのが三台で、それぞれに違った派手な味のあつた飾りと服装が人目に立つた。明石の尼君がいっしょに来たのは、

「今度の参詣に尼君を優遇して同伴しよう。老人の心に満足ができるほどにして」
と院がお言い出しになつたのであつて、はじめ明石夫人は、

「今度は院と女王様が主になつての御参詣なんですから、あなたなどがまじつておいでになつては私の立場も苦しくなりますからね、女御さんがもう一段御出世をなすつたあとで、そのときに私たちだけでおまいりをいたしましう」

と言つて、尼君をとどめていたのであるが、老人はそれまで長命で生きておられる自信もなく心細がつてそつと一行に加わつて来たのである。運命の寵児であることがしかるべきことと思われる女王や女御よりも、明石の母と娘の前生の善果がこの日ほどあざやかに見えたこともなかつた。

十月の二十日のことであつたから、中の忌垣にはう葛の葉も色づく時で、松原の下の雑木の紅葉が美しく波の音だけ秋であるとも言われない浜のながめであつた。本格的な支那樂高麗樂よりも東遊びの音楽の方がこんな時にはびつたりと、人の心にも波の音にもあつてゐるようであつた。高いこずえでなる松風の下で吹く笛の音もほかの場所で聞く音とは變つて身にしみ、松風が琴にあわせる拍子は鼓を打つてするよりも柔らかでそして寂し

くおもしろかった。伶人^{れいじん}の着けた小忌衣^{おきみぎ}の竹の模様と松の縁がまじり、挿頭^{さくず}の造花^{ぞうか}は秋の草花といっしょになつたように見えるが、「求子^{もとこ}」の曲が終わりに近づいたときに、若い高官たちが正装の袍の肩を脱いで舞の場へ加わった。黒の上着の下から臙脂紅紫^{ようじこうし}の下襲^{したぎ}の袖をにわかに出し、それからまた下の紺^{くろ}の赤い袂^{たもと}の見えるそれらの人の姿を通り雨が少しぬらしたときには、松原であることも忘れて紅葉のいろいろが散りかかるように思われた。その派手な姿に白くほおけた萩の穂をさしてほんの舞の一節だけを見せてはいったのがきわめておもしろかった。

院は昔を追憶しておいでになった。途中で不幸な日のあったことも目の前のことのように思われて、それについて語る人もお持ちにならぬ院は、関白を退いた太政大臣を恋しく思召された。車へお帰りになった院は第二の車へ、

たれかまた心を知りて住吉の

神代をへたる松にこと問ふ

という歌を懷中紙に書いたのを持たせておやりになった。尼君は心を打たれたようにしおれてしまった。今日のはなやかな光景を見るにつけても、明石を源氏のお立ちになったころの嘆かわしかったこと、女御が幼児であったころにした悲しい思いが追想されて、運命に恵まれ

ていることを知った。そしてまた山へはいった良人^{おつと}も恋しく思われて、涙のこぼれる気もちをおさえて、

住の江を生けるかひある渚^{なみさき}とは

年ふるあまも今日や知るらん

と書いた。お返事がおそくなつては見苦しいと思い、感じたままの歌をもつてしたのである。

昔こそ先づ忘れね住吉の

神のしるしを見るにつけても

とまたひとりごともしていた。一行は終夜を歌舞に明かしたのである。二十日の月の明かりではるかに白く海が見えわたり、霜が厚く置いて松原の昨日とは変わった色にも寒さが感じられて、快く身にしむ社前の朝ぼらけであった。自邸での遊びには慣れていても、あまり外の見物に出ることを好まなかった紫の女王は京の外の旅もはじめての経験であつたし、すべてのことが興味深く思われた。

住の江の松に夜深く置く霜は

神の懸けたる木綿^{うめわた}かづらかも

紫夫人の作である。小野篁^{おののから}の「比良の山さへ」と歌つた雪の朝を思つてみると、奉った祭を神が嘉納された証^{あかし}の霜とも思われて頼もしいのであつた。

女御、

神人の手に取り持たる榊葉^{さかきば}に

中務の君、

木綿かけ添ふる深き夜の霜

祝子が木綿うち紛ひ置く霜は

実にいちじるき神のしるしか

そのほかの人々からも多くの歌は詠まれたが、書いておく必要がないと思つて筆者ははぶいた。こんな場合の歌は文学者らしくしている男の人たちの作も、平生よりできの悪いのが普通で、松の千歳から解放されて心の琴線に触れるようなものはないからである。

朝の光がさし上るころにいよいよ霜は深くなって、夜通し飲んだ酒のために神楽の面のようになった自身の顔も知らずに、もう篝火も消えかかっている杜前で、まだ万歳万歳と櫓を振って祝い合っている。この祝福は必ず院の御一族の上に形となつて現われるであらうとますますはなばなしく未来が想像されるのであった。ひじょうにおもしろくて千夜の時のあれと望まれた一夜がむぞうさに明けていったのを見て、若い人たちは渚の帰る波のようにここを去らねばならぬことを残念がった。はるばると長い列になつて置かれた車の、垂絹の風に開く中から見える女衣装は花の錦を松原に張ったようであつたが、男の人たちの位階によつて変わった色の正装をして、美しい膳部を院の御車へ運びつづけるのが布衣たちにはひじょうにうらやましく見られた。明石の尼君の分

も浅香の折敷に鈍色の紙を敷いて精進物で、院の御家族なみに運ばれるのを見ては、

「すばらしい運を持った女というものだね」

などと彼らは仲間で言い合つた。おいでになつたときは神前へさざげられる、持ち運びのめんどろな物を守る人数も多くて、途中の見物もじゅうぶんにおできにならなかつたのであつたが、帰途は自由なおもしろい旅をされた。この楽しい旅行に山へはいりきりになつた入道をあずからせることのできなかつたことを院は物たらず思召されたが、それまでは無理なことであらう。實際老入道がこの一行に加わつているとしたら見苦しいことでなかつたであらうか。その人の思ひ上がった空想がことごとく実現されたのであるから、だれも心は高く持つべきである。と教訓されたようである。いろいろな話題になつて明石の人たちがうらやまれ、幸福な人のことを明石の尼君という言葉も流行つた。太政大臣家の近江の君は双六の勝負の賽を振る前には、

「明石の尼様、明石の尼様」

と呪文を唱えた。

法皇は仏勤めに精進あそばされて、政治のことなどにはなんの干渉もあそばさない。春秋の行幸をお迎えになるときにだけ昔の御生活がお心の上に姿を現わすこともあるのであつた。女三の宮をなお氣がかりに思召され